から卒業まで漱石の家で書生をしていた人物でのちに第三高等学校教授となった。熊本の家を引き払った漱石とともに上京した。千江はこうした五高の懐かしい人々と旧交をあたためていたようだ。

昭和三年九月の句稿には、「松山着、城戸屋、漱石師の「坊っちゃんの間」の題で「無花果を食ふや故人の間に近く」と詠んでいる。また「坊っちゃんの間に来し弟子や秋の朝」ともある。さらに「城戸屋、坊っちゃんの間に泊まる」と題して「秋さぶや戸棚の下の一五畳」「先生の戸棚の秋を探しけり」「先生の背中の後や秋畳」と、漱石への思いは尽きることがない。

昭和一一（一九三六）年七月の松山への旅でも坊っちゃんの間を詠んでいる。「夏帽を置くや昔の違い棚」「汗の手に柱を撫でて人恋し」「旅扇先生よりもいのちなが」「先生の机の座なる星涼し」「弟子ありぬ葭簀の影の淡き時」と『千江句集』から抜粋してみたが、描かれるのは師漱石への哀惜の念である。

千江がまだ五高生であった明治三二年一〇月一七日漱石を詠んだ句がある。「漱石は酒嫌ひなり冬籠（ふゆごもり）」。これらの句は、それから四〇年以上も経って漱石の「弟子」であったことを懐かしむような関係が五高時代にはぐくまれたことを示すものだろう。熊本時代の漱石の姿は寺田寅彦がよく伝えるが、寅彦だけでなく、「師と弟子」という濃密な関係をはぐくんだのが、熊本時代であったことはこの厨川千江との交流を見ても明らかであろう。漱石は熊本時代生徒たちの心に残る「先生」として存在したのである。

注

(1) 小島武雄「『龍南』と夏目漱石」（『龍南会雑誌』二〇〇号、昭一・一二）

(2) 原井拓士「厨川千江の俳句について－解説－」（原井拓士編著『厨川千江句集』昭五六・一〇、非売品）

(3) 「紫溟吟社・その成立と終焉」（『熊本商大論集』一五号、昭三七・一二）

(4) 紫川は、帝国大学入学後も、雑誌『日本人』への投句を続け、明治三五年三月二〇日刊を最後に一四句掲載されている。千江の俳句は『日本人』には見られない。

(5) 注(2)に同じ

(6) 子規選に紫川五句、四方太選に紫川、千江各一句、霽月選に千江二句、虚子選に紫川一句が掲載されている。

(7) 拙著「鏡子の『身投げは事故』」（『漱石がいた熊本』風間書房、令一・五）に鏡子夫人の事件について述べた。

(8) 「日本」に掲載された寅彦の俳句は、三二年一〇月一三日に「芝垣に煙草干しけり鶏頭花」「寺子屋の門を這入れば鶏頭花」、同二一日に「虫売や火の用心の莫入れ」、二三日に「莫刻む音や戸を渡る夜寒かな」、二六日に「山賊の莫くゆらす夜長かな」の五句

(9) 注(2)に同じ

(10) 蒲生紫川「九州の新派俳句会」（『懸葵』明三七・五）

(11) 注(10)に同じ

(12) 渋川玄耳『鈍語』（大三・一）によると熊本では漱石の家を二度訪問したという。子規には明治二九年から俳句の添削を乞うたことが記されている。

(13) 事情は不明だが、「紫溟吟社第二回兼題」の選句は東京の松瀬青々が行っている。

(14) 「父のあれこれ」は、『厨川千江句集』の原井拓士の解説中にあるが、本文の所在は不明で原井の引用文による。

(15) 注(2)に同じ

『龍南会雑誌』の編集委員としても活躍し、小説、戯曲、詩なども掲載している。「夕闇」は詩と短歌が圧倒的に多いが、「紫溟吟社」に名を残しているのが興味深い。また、ホトトギス派の俳人、村上霽月が、『龍南会雑誌』一〇一号（明三六・六）、一〇二号（明三六・一一）、一〇九号（明三八・一）の紫溟吟社俳句の選者を務め、霽月の句も一〇二号に一〇句掲載されている。

「紫溟吟社」を興した千江は教師となり生前一冊の句集も残さなかったが、「防長新聞」俳壇選者を務め、俳句界に貢献した。紫川は内科医となり、結核の「大気安静療法」を初めて本格的に紹介した。千江は昭和一五（一九四〇）年六月一三日死去した。その報を受けた紫川は「訃音聞く五月雨の窓に吾も老ゆ」と詠んだという（茂野吉之助『療苑』）。紫川はその二年後、昭和一七（一九四二）年九月八日死去している。

七、漱石と厨川千江

厨川千江は、五高から帝国大学国文学科に進学した。しかし、その『句集』には、明治三一年秋冬の三九句、明治三二年の八八句と明治三四年から三五年の一八句、明治三七年の一九句があるのみで、俳句を熱心にやった形跡はない。

五高時代の友人で、紫溟吟社にも名を連ねた白仁三郎（白楊、のちの坂元雪鳥）とは大学時代も親しく、生涯の友であったという。大学時代、肋膜炎を患った千江のために、雪鳥は毎日欠かさず送薬の労をとった。大学卒業後、雪鳥は東京に残り、千江は地方の教師として遠く離れた地にすんだが、上京の機会があるときは、雪鳥と会うために必ず一日あけていたと、長女の厨川登久子が書き残している[14]。

千江と漱石とのその後の交流はどのようなものだったか、書簡も残っていないので詳細は不明である。しかし、『句集』を編集した原井は、漱石が留学先のロンドンから帰朝後、千江との交流が再開したと見ている。漱石は五高を辞職し、第一高等学校に就職する。一高では、早速俳句会が開かれ、そこで漱石は「落ちし雷を盥に伏せて鮓の石」という句を詠んだ。原井は千江がこの句会に「待ち構えていた、とばかりに出席したであろうことは察するに余りあるところ」と記している。というのもこの句が書かれた短冊を千江が所持していたからである。原井は、この句会の席上で詠まれたものを千江に与えたと推測している[15]。

また、千江は「灯を消せば涼しき星や窓に入る」という明治四四（一九一一）年作の半切を所持している。漱石の修善寺の大患の折には、やはり機会を見て上京し、漱石を見舞ったのではないだろうか。

千江は、明治三七（一九〇四）年七月に帝国大学を卒業すると、翌三八年三月から郷里島根県の島根県立第二中学校の国語教師となった。以後、島根県立杵築中学校教諭、千葉県立佐倉中学校長を経て、大正一〇（一九二一）年三月、山口県立山口図書館長に就任する。しかし、この間千江は全く句作を行わなかった。それが、昭和二（一九二七）年一月から同四年一二月の三年間に一六〇〇余句を詠んだのである。その句のなかに漱石と子規を詠んだ句が散見される。

まず昭和二年一月伊予への出張で詠んだ句に「子規先生と漱石先生と」の前書きで「豎子にある天下の二師や納豆汁」がある。また同年八月の句中に「東京、寒月居」とあり「朝々の髯剃る縁や金魚鉢」の句がある。寅彦の家に泊まったのだろう。そのあとには「雪鳥邸」の前書きのある句もある。「雪鳥」は坂元雪鳥、白仁三郎のことだ。昭和三年四月の句稿には「雪鳥居、幼児を悼む」の前書きのある句もある。同じく「寒月居」の句の少し後には「湯浅大人を訪ふ」の前書きのある句もある。湯浅大人とは、湯浅廉孫のことである。明治三二年

がいを与えていることも意識していたはずだ。

また、漱石の関心が俳句ではなく、本来の英文学そのものに戻りつつあったことも大きな変化ではなかっただろうか。五高で教鞭を執ることで、漱石の研究心に火がついたのではないか。漱石は、「トリストラム、シャンデー」（『江湖文学』明三〇・三）、「英国の文人と新聞雑誌」（『ほとゝぎす』明三二・四）、「小説『エイルヰン』の批評」（『ほとゝぎす』明三二・八）の三本の論文を書いている。さまざまな英文学を授業で扱っているが、その博識については生徒の回想でしばしば語られている。漱石が熊本で最後に住んだ北千反畑町の家の家主磯谷氏は隣に住んでいたが「夜中にいつ起きてみても、二階に灯りが点っていて、漱石の勉学している気配がうかがわれた」（山崎貞士『熊本文学散歩　章五一・四）という。熊本にありながらも、英国で流行している作品をいちはやく取り寄せて読むような、英文学に対する関心の高まりが、句作の減少に関わっていたように思われる。

六、「紫溟吟社」の終焉

五高の枠を越えて市井にまで広がった「紫溟吟社」の活動だったが、明治三三年七月に千江、紫川、白仁白楊、平川草江が大学に去り、漱石もまた英国留学のため熊本を離れると、五高生の勢力は急速に衰えていく。『龍南会雑誌』第八一号（明三三・九）では「紫溟吟社の衰頽」と題して、いまや「紫溟吟社」は「僅かに命脈を保ちつつある」に過ぎず、「尾羽打枯らしたる寒鴉」のような有様だと嘆いている。このため、町方の池松迂巷、玄耳、川瀬六走が「紫溟吟社」の中心となり、明治三四（一九〇一）年六月には機関誌『銀杏』を発行した。蒲池正紀によると誌型は縦二五・四、横一三・二センチの細長い本である。表紙に銀杏の字が木版で刷られているが、玄耳が熊本城の銀杏の古木から採った台木に、長男の手を取って書かせたものを彫ったという（「紫溟吟社その成立と終焉」）。

九州各地の句会と連携し、句も全国から募った。俳句だけでなく、和歌、短文、漢詩なども掲載した。この『銀杏』の発刊は『ほとゝぎす』第四巻一一号（明三四・八）でも「六月二十日銀杏を発行致候二号は七月二十日に発行致候」と迂巷の署名で報じられた。しかし雑誌は一一号（明三五・五）で廃刊。『ほとゝぎす』第六巻四号（明三五・一二）からしばらく途切れ、第一〇巻一二号（明四〇・九）の「紫溟吟社同人」を最後に「紫溟吟社」の名は見られなくなる。句会は継続したが、日露戦争の勃発で明治三七（一九〇四）年六月、玄耳、長野蘇南、中村桂州らが出征すると、新聞掲載の句も激減した。

一方、『龍南会雑誌』では第九二号（明三五・四）から、再び毎号紫溟吟社の句が掲載されるようになる。『ほとゝぎす』第一一巻四号（明四一・一）の「地方俳句会」には「五高俳句会」の名が見えるが、これを最後に五高の名も見られなくなる。

広瀬楚雨の「俳壇反魂香」によると明治四二（一九〇九）年春に、町方と五高生との間に亀裂が生じた。「夏目先生」が始めた「紫溟吟社」は五高のもの、と五高生が主張したのだ。町方有志は「紫溟吟社」から離れ「銀杏会」と称するようになったという。五高生たちは「紫溟吟社」を取り戻した体であったが、明治四三（一九一〇）年一一月の『龍南会雑誌』第一三七号を最後に、姿を消す。しかし「紫溟吟社」がまいた新派俳句の種は確かに熊本に根付いた。

この中で注目すべきは『龍南会雑誌』第一〇五号（明三七・三）にわずか三句であるが「紫溟吟社」会員の句として掲載された「夕闇」と明治四一年から四三年にかけて多くの俳句を残した「水郷」である。「夕闇」は内田虎六、のちの作家下村湖人である。「水郷」はのちに漱石の門下に入り、小説家・評論家として活躍する江口渙である。

これに驚いた俳人がいた。のちに熊本の新派俳句の中心となり、「九日俳壇」選者となった広瀬楚雨だ。明治一三（一八八〇）年生まれで、当時満二〇歳だった。楚雨は、青年雑誌『文庫』の愛読者で、しばしば俳句を投句した。東京で『ほと、ぎす』が刊行されると俳句に没頭した。熊本には俳友がいなかった。ところが突然、新聞紙上に「紫溟吟社」という新派俳句同人の句が次々と掲載された。「熊本の何処にこんなに沢山の俳人がいたのだろう」と驚き、また「多くの同好者を見つけだした喜びに急に世の中が明るくなつたような気持ちになつた」（「俳壇反魂香」『日本談義』昭四一・七）という。

楚雨はさっそく迂巷に連絡し、一本竹町の南山楼で開催された第二回紫溟吟社句会に出かけた。楚雨は驚異的な記憶力の持ち主で「紫溟吟社」について貴重な証言を残している。最も注目されるのは、句会に漱石が一度も現れなかったということだ。楚雨は漱石の指導を期待していたが、句会に漱石の姿はなかった。先輩も後輩もない自由な雰囲気で互いの句を痛烈に批判したり、自分の句を弁護したりしたという。

漱石は、七月一五日には英国留学のため熊本を離れるが、その直前まで選句を行った。新聞に掲載された漱石選の紫溟吟社の俳句は前述の「例会急吟俳句抄録」をはじめとして「南山楼例会運座」（「九州日日新聞」明三三・二・一七）、「紫溟吟社第三回兼題」（同明三三・四・二四）、「紫溟吟社第四回兼題」（同明三三・六・八）、「第五回兼題」（同明三三・七・一三）の五回である。[13]

漱石はロンドンから帰朝後、五高を退職するが五高の紫溟吟社からしばしば選句を依頼された。漱石は『龍南会雑誌』第一〇三号（明三六・一二）でそれを実現した。「俳句　紫溟吟社」として「秋晴や鹿にものやる旅の人」他四二句が「漱石選」として掲載されている。

漱石は寅彦や千江、紫川のように熱心に句稿を持参する生徒に対しては添削を行ったようだが、積極的に指導をしたという形跡はない。むしろ楚雨が記したように自由な雰囲気の中で互いの句を批評し、良いと思う句を選ぶ「運座」の形式を、五高生の中に根付かせたのではなかったか。玄耳は、漱石が「友人の正岡がやるんで、少し真似て見たが、俳句の事は余り知らない」と言いながら、持って行った句稿に「朱圏」を施したあと、再び見直してほとんどの句に朱圏がついてしまったというエピソードを『鈍語』に記している。しかも大喜びでそれを改めて写して子規に送ったところ、一句しか「日本」に採られなかったという。漱石が、選句はしても指導をしなかったのは、自らの分をわきまえていたということではないだろうか。五高生たちには教師として指導しても、町方の人々を指導するような「俳句宗匠」ではなかった。生徒たちの句も最終的には子規へ送った。漱石は自身を俳句の師とすることはできなかったのではないか。あくまでも漱石にとって俳句の師は子規だった。

漱石は、熊本に来て早々子規に宛てて「近頃俳況如何に御座候や小生は頓と振はず」（明二九・六・一〇付）と述べたが、同様の言を句友への書簡でも訴えた。「小生詩才漸々頓挫」（明二九・六・一〇付藤井紫影宛書簡）、「小生当地到着後一向不振日毎に堕落を感じ候には嘆息の至り」（明二九・一一・一付、水落露石宛）と、松山での俳句熱からは程遠いようだ。平成八年版『漱石全集』によると漱石の句作は明治二九年五二二句（うち熊本時代は二四六句）をピークとして、三〇年二八八句、三一年一〇三句、三二年三五〇句となっている。松山時代と異なり、身近なところに切磋琢磨するような句友の存在がいなかったことが大きな原因だろう。そのような漱石にとって俳句について熱心に勉強しようという生徒の存在が、漱石の句作を支えていたという側面もあることが、明治三二年の作句の増加に示されているのではないか。無論、病の床にある子規に句稿を送ることが、子規に生き

るだけ多くの句を詠むことである。一〇分一〇句と決めてやることもあった。『句集』にはさらに一一月一四日の小窩運座、一一月一九日には、初めて「町方」の俳人である迂巷宅での運座が開かれたことがわかるが、そのあとは、記録がないのでわからない。これらの句会のうち、どれが「紫溟吟社」の句会であるのか判別しがたいが、紫川のいう「三二年秋から」の再開は見てとれる。

これを『ほとゝぎす』の「地方俳句界」に記載された「紫溟吟社」の記録と照らし合わせてみると、一〇月二八日が第八回例会（於忍法寺）、『句集』一一月二日の紫川庵運座は、『ほとゝぎす』（三巻四号、明三三・一）には「松子窩」と記載されるが「第九回例会」となる。ここに記載された句は『龍南会雑誌』第七六号（明三二・一二）に紫溟吟社の句として掲載されたものと重なっているので、『龍南会雑誌』の句も、おなじ第九回例会の句と見ていい。

明治三二（一八九九）年秋、厨川千江の尽力で復活した「紫溟吟社」は、さらに校外の有志を加えて、「九州日日新聞」に姿を現す。初めてその名が出たのは明治三二年一一月二九日。「黄鐘白聲」と題され、連日一〇数句ずつ一二月一九日まで九回にわたって掲載された。新聞掲載に尽力した池松迂巷をはじめとして五高生の竹田双松、白仁白楊、山口諫江、後に大江小学校校長となった小塚雪枝ら一八人が名を連ねた。その後、第六師団の渋川玄耳、中村桂州、川瀬六走らが加わった。

玄耳は本名柳次郎、明治五（一八七二）年四月二八日、佐賀県生まれ。明治三一（一八九八）年熊本の第六師団に赴任した。のちに朝日新聞社に入社し、漱石と深く関わりを持つが、熊本ではまだその親交は深くない。玄耳の著書『鈍語』には熊本で二度漱石の家を訪問したことが書かれている。俳句については、明治二九年から郵便で正岡子規の添削を受けていた。同年一〇月二九日付「日本」に初めて句が掲載されて以来、二九年に六句、三〇年に一八句、三一年に一六句掲載されており、漱石と同じ日に掲載されることもあったから、その名前に見覚えがあったかもしれない。[12]

迂巷は本名常雄。明治八（一八七五）年、現在の熊本市中央区黒髪に生まれた。明治三一年尋常中学済々黌を中途退学後は家業の質商を手伝っていた。漱石は高浜虚子宛書簡（明三二・一二・一一付）で、迂巷を「先般来突然知己に相成候人」と述べているので、面識を得たのは一一月頃だったと思われる。

迂巷は、東京の俳人の句を掲載したいと虚子に願ったが返事がなかったため漱石に仲介を頼んだのだ。漱石は、虚子に迂巷が新派俳句普及に熱心なことを説き、「俳句の何ものたるを解せざる有様」の九州に新派俳句を「鼓吹奨励」するために協力を要請した（明三二・一二・一一付虚子宛書簡）。漱石の尽力によって、一二月二一日の新聞紙上に虚子の句が一〇句掲載されたのを初めに東京の俳人たちの句が次々と紹介されることになる。またここで「当地にありては夏目漱石氏は紫溟吟社を率ゐて盛んに斯道の為めに西海の俊英を鼓吹せられ」と、初めて俳人漱石の名が新聞紙上に登場した。紫溟吟社の俳句は一二月九日から連日「九州新聞」にも掲載された。

千江と迂巷が発起人となって第一回の「新派俳句会」が開かれたのは翌三三（一九〇〇）年一月二一日である。「例会急吟俳句抄録」として二七、二八日の「九州日日新聞」に、漱石選として五二句が掲載された。新聞には「胡蝶の題既に陳の陳なるもの従つて同人の句々亦多く陳腐を脱する能はず漱石氏の選に入りたるもの僅かに左の五十二句」と記されている。二月一一日開催の第二回新派俳句会は二月十日付の新聞に予告が載り広く市民に呼びかけられた。『ほとゝぎす』第三巻五号には「一月二一日新年宴会を二月一一日例会を共に南山楼に開く新入会者玄耳楚雨半冬園湖南古琴青海子鉉唯空の数氏」とある。

彦の名が見えることは先述した。第二巻四号（明三二・一）の『ほとゝぎす』には「各地俳人分附の表」として「肥後　漱石。千江。紫川」の名前が挙がっている。「紫溟吟社」の名前が出るのは第二巻一〇号（明三二・七）で「紫明吟社（熊本）」として「一報仕り候。何度も同じ俗調の跋扈は口惜しき限りに候。茲に同臭のもの一小団を結び漱石詞宗を仰ぎて、ゆく〳〵は大に新派の趣味を西陸に鼓吹せんの野志有之候。御一笑被下度候。去る五月七日第五回の例会を城東の白川庵に開き候。会者十三名。了りて散会致候。」とあり、第五回例会があったことが伝えられている。雲涯を始めとして、寅彦、千江、紫川ら七名の句が掲載されている。これは『龍南会雑誌』七三号（明三二・六）に同じ句が掲載されているので、同じ句会で詠まれたものであろう。しかし、その後空白があり、次の記録は第三巻一号（明三三・一）になってからで、「地方俳句界」に「紫溟吟社（熊本）」として「一〇月二八日第八回を忍法寺に一一月二日第九回を松子窩に開く当地薊会の半村子新たに加り周旋頗る勉む得吟左に」として白楊、千江、奇瓢など一〇名の句が掲載されている。

奇瓢は野間真綱の号である。『龍南会雑誌』には一三句掲載されている。ただ、音瓢という号で三句掲載されているのは奇瓢の誤植と思われるので、それを加えると一六句になる。野間は明治一一（一八七八）年一月二五日鹿児島県生まれ。明治三〇（一八九七）年に五高の予科一部に入学し、三三（一九〇〇）年帝国大学に進学した。漱石の英国帰朝後から近く接するようになるが、「五高時代は非常に厳格な先生で時間内は皆小さくなつて震へて居た」（「文学論前後」『漱石全集』別巻平八・二）と回想にあるように、紫溟吟社に属したものの漱石に近く接した形跡がない。

この空白の期間のことについて紫川はあれほどの情熱を持って始められたにもかかわらず「三十二年の春以来千江氏も僕も或る事情の為殆ど全く俳句をやめてゐた」という。[10] そこにどんな「事情」があったのかはわからない。三二年春は、千江にとって三年生最後の学期で、六月末には卒業試験を受けなければならなかったはずだが、卒業試験を受けていない。学籍簿には「欠席回数超過」と朱書きされている。つまり留年である。千江は大学時代にも健康を害しているので、体調不良が原因だったかもしれない。

紫川も病気のためしばらく故郷に帰っていたという。ところが三二年秋、療養中の紫川に「千江氏は書を寄せて、今回校外の有志多数でき、紫溟吟社を再興して大拡張をなすとのことを通じてきた」。[11] 有志とは「陸軍側の六走、玄耳、町側の迂巷、楚雨、莨楚諸氏で、ことに迂巷子の熱心ときたら驚くべきものであつた」と紫川は書いている。

五、紫溟吟社の拡張

『龍南会雑誌』第七五号（明三二・一一）には、新たなメンバーも加え一五人が「紫溟吟社」として句を掲載している。新派俳句が校外に広がりを見せた時期である。もちろん『龍南会雑誌』は五高の校友会雑誌であるため、町方の俳人の名はない。

千江の『句集』には、明治三一年の俳句は一〇月二二日のものを最後に何の記録もない。明治三二（一八九九）年のものとしては紫川の記述のように秋から再び、句会の記述がある。「九月二十三日小園にて運座」「同急吟三十分」「九月三十日忍法寺にて運座」「十月四日小園にて運座」「十月七日小園運座」「十月十一日まさこ庵運座」「十月十三日紫川子と」と、前書きのある句が並び、三日にあげず句会が開かれていることがわかる。これは一一月も続き、二日には紫川庵運座、一二日には「愚陀仏庵急吟三十分」という前書きもあり、漱石の家で句会があったことがわかる。「急吟」とは時間を決めてその間にでき

「繕はぬ垣の穴より初嵐」「鬼灯やどの子にやろと吹き鳴らす」「何虫ぞ今宵も簀戸に来て鳴くは」の三句であった。

寅彦は、漱石のまねをして「日本」に俳句が掲載されるとそれを切り抜いて紙袋にためるのを楽しみにしたという。しかし、寅彦の五高時代、「日本」に掲載された句はこのほかには三一年一〇月二一日の三句のみである[8]。

一〇月二日に漱石宅で開かれた運座には寅彦も参加している。「紫溟吟社」創立メンバーの一人となるのだが、『龍南会雑誌』にはその同人として寅彦が詠んだ俳句が七句掲載されているだけである。『ほとゝぎす』に「地方俳句界」が掲載されるようになったのは明治三二年七月刊の一〇号からだが、そこには紫溟吟社メンバーとして一句掲載されている。紫溟吟社の活動そのものが千江や紫川の事情によって三二年春から暫く途切れ、寅彦自身が七月には、五高を卒業するから名が挙がらなくなるのは仕方ないことではあっただろう。寅彦は、このような句会にはあまり熱心ではなかったように見える。坪内稔典は前掲解説で「寅彦の俳句作りは、漱石とただ二人の共同の内に閉じており、そこに自足していた」と述べている。明治三二年七月に五高を卒業して上京すると次第に句作も減り、明治三五年以降は激減した。寅彦の総句数は一三九七句。漱石の半分に留まっている。

漱石の死後、寅彦は「俳句とはかゝるものぞと説かれしより天地開けて我が眼に新」と歌を詠んだ。新たに開かれたのは、俳句の世界というより、多彩な言葉で紡ぎ出す文学の世界だったのではないか。寅彦の随筆「祭」は、初めて『ほとゝぎす』（明三二・一一）に掲載されたものだが、寅彦の本領は俳句より随筆にあると思われる。

四、「紫溟吟社」の活動

『龍南会雑誌』に、千江と紫川の俳句が掲載されるのは第六八号（明三一・一一）からである。第六九号（明三一・一二）の「雑報」「○近事片々」には「●俳句の会につき、近来我校にて俳句の研究絶えたりしが、此度校内の有志は漱石宗匠に乞ふて俳句の会を起こし、斯道の研究をなすと云ふ、同好の士奮つて入会せらるゝあらば益する処多るべし、但し毎月一回運座を催す由にて、入会希望者は紫川君のもとまで申込まるべしとなり」という記事が載った。『龍南会雑誌』に初めて「紫溟吟社」の名が現れたのは、第七一号（明三二・三）である。

「紫溟吟社」の活動の詳細はなかなか把握できないが、この間の様子をほんの少しだけ知ることができるのが『厨川千江句集』（原井拓士編、以下『句集』）である。この『句集』は、昭和五六（一九八一）年原井拓士によって上梓されたもので、厨川千江長女・登久子の急逝後、その蔵書の中にあった「千江の句稿及び短冊、色紙」に「当時の新聞雑誌等に投稿されていた句を加えて、とりあえず年代順に収録した」ものという[9]。この『句集』に五高時代の俳句が前書きとともに残されている。

一〇月二日漱石の家で初めての運座が開かれてのち、『句集』には「十二日、久本寺にて運座」「十月二十二日」という前書きのある句があり、一〇日に一度句会を開き、情熱をもって句作に取り組んでいたことがわかる。「鳴子つけし愚陀仏庵の折戸かな」は、千江が当時の作として書き残していた句の一つだが、内坪井の漱石の家を「愚陀仏庵」と称していたこと、その戸に鳴子がついていたことがわかり興味深い。

『ほとゝぎす』の第二巻一号（明三一・一〇）から紫川、千江、寅

もし「自殺未遂」であるならば、とうていこのような対応はできないのではないか。こうしたことも、鏡子夫人の事件を「自殺未遂」と考えられない根拠の一つでもある。(7)

漱石はこのとき、点をやるとも、やらないとも言わなかったらしい。太田文平は、この生徒が、竹崎音吉であることを『寺田寅彦』(新潮社、平二・六)で明らかにした。この時の竹崎の成績は、五高記念館に保存されているが、英語の講読の点数が不足しているものの、留年することなく進学している。寅彦の委員としての役割が功を奏したか否かは、成績表を見る限り不明である。

寅彦は委員としての役目を果たしたあと「俳句とは一体どんなものですか」と尋ねたという。寅彦自身「俳句に対する興味が大分発酵しかけてゐた」時だった。寅彦のこの年の一月一〇日の日記には、「春陽堂懸賞俳句」に応募したことが記され、「野に老て菜の花のみは見飽かざる」「僧が庵菜の花生けて茶もあるらし」の二句が書き留められている。

漱石から「俳句はレトリックの煎じ詰めたものである」「扇のかなめのやうな集注点を指摘し描写して、それから放散する連想の世界を暗示するものである」「花が散つて雪のやうだと云つたやうな常套な描写を月並といふ」「秋風や白木の弓につる張らんと云つたやうな句は佳い句である」「いくらやつても俳句の出来ない性質の人があるし、始めからうまい人もある」(「夏目漱石先生の追憶」)というような話を聞かされて、寅彦は俳句への興味をかきたてられた。

夏休みに帰郷すると子規や虚子らを中心とした初めての日本派の句集『新俳句』(明治三一・三)を読んで俳句の勉強をした。「手当り次第の材料をつかまへて二三十句ばかり」を作り、九月に熊本へ着くとすぐに漱石を訪問した。すでに内坪井の住居に転居していた漱石は、寅彦の句稿に短評や添削をして次に行ったときに戻した。寅彦は、一週間に二度も三度も「丸で恋人にでも会ひに行くやうな心持ち」で内坪井の漱石宅に通ったという。

寅彦が漱石に見せた句稿は『寺田寅彦全集』第一一巻(岩波書店、平七・一〇)に二一収録されている。明治三一年から三二年にかけての約一年間で総数五八五句。漱石が正岡子規に句稿を送って添削してもらったように、今度は漱石が寅彦の句稿に○をつけたり、添削したりした。漱石が子規に送った句稿数は三五で総数一四四八句。寅彦の句稿はわずか一年間であったのに対し、漱石は明治二八年から三二年までの四年間だから、寅彦がこのままの勢いで俳句を作っていたら漱石の全句数約二五〇〇句を軽く越えていたはずだ。しかし、そうはならなかった。

漱石に見せた最初の句稿で、全五〇句のうち○が付いているのは一〇句、◎◎は一四句である。坪内稔典は、◎について「傑作とか秀作というのではなく、俳句として一応は合格」(『寺田寅彦全集』第十一巻解説)という印、という。しかし、たいていこの二重丸のついた句の中から『ほとゝぎす』「日本」などに採られているから、○が「一応合格」、◎あるいは◎◎は「よくできている」くらいの意味ではないか。その中の一句「鳴子引日に五匁の麻をうむ」が初めて『ほとゝぎす』第二巻一号(明三一・一〇)に掲載された。同じ号に千江や紫川の俳句も掲載されているが、これらは、課題句で入選したもので、紫川は子規選に五句、四方太選に一句、虚子選に一句、千江は、四方太選に一句、霽月選に二句選ばれている。寅彦の句は、それとは別に漱石と並んで掲載された。ただ、寅彦の『ほとゝぎす』入選句は千江、紫川と比較すると圧倒的に少ない。しかし、第三巻二号(明三二・一一)で寅彦の「草枯の道鄙に入る道祖神」という句が子規選で「天」を取っている。これには寅彦も格別の思いを抱いただろう。

新聞「日本」に最初に掲載されたのは、明治三一年一〇月一一日で

ことも稀ではない」（紫川前掲文）という。『漱石全集』に収録されている唯一の紫川宛書簡（明三一・六・一〇付）には「大兄の俳句千江氏の分と共に過日子規手許迄送り置候処本日着の日本に三句丈掲載」とある。これは六月四日付新聞「日本」に掲載された千江の俳句三句「五月雨や先づ箒木の巻を読む」「打水や竹の小柄杓女の童」「打ち揃ひて猿は小袖を更衣」、五日掲載の紫川の俳句三句「虫干や幼児の陣羽織着たる」「蝙蝠の愚を□らせる飛び様や」（一字不明）「呉のむら雲越の夕立となりにけり」のことである。これらが「日本」に掲載された最初の句だが、この二人の俳句熱の高まりを示すかのように、雑誌『日本人』、新聞「日本」に二人の俳句が次々と掲載された。

千江は、この時代のことを長女に語っていたようで、厨川登久子の「父のあれこれ」に

> ある時は、この前提出ずみの句の批評を、いつもは次に行った時に批評してもらうのだが、その時は先生は何も言わない。「この前の――。」と、よほどいいたいのを父も我慢したのだそうだ。やがてして別の機会に父の句稿を示し、
>
> 「子規からこういって来たよ。」
>
> というわけで、言いわけがましいことを言わなかった漱石、それを感心しているらしかった。

と記されているという。(5)

五高時代の生徒の句稿として残っているのは寺田寅彦のものだけだが、この回想から、句稿を持って行った生徒には寅彦と同様の批評を行っていたことが想像される。そのうちのすぐれたものを子規に送っていたものだろう。特に千江は熱心で、秋になると「俳句会」を興そうと、学校内で俳句を作るという者、俳書を読むという者すべてに声を掛け、一〇月二日内坪井の漱石の指導のもとに漱石の家で初めての運座を開くことになった。メンバーは、寺田寅彦、千江、紫川のほか、白仁三郎（白楊、のちの坂元雪鳥）、石川芝峰、平川草江、古橋蓼舟など一一人が集まった。これが熊本に初めて新派俳句の結社ができた記念すべき日である。当日の互選最高点の句は千江の「雁鳴くや馬上硯をとりよする」だった。新派俳句会は、厨川千江と蒲生紫川によって「紫溟吟社」と命名された。

同じく一〇月、それまで四国松山で柳原極堂によって刊行されていた俳誌『ほとゝぎす』が経営に行き詰まり、東京に拠点を移して刊行された。編集は高浜虚子にまかされた。この『ほとゝぎす』の第二巻一号（明三一・一〇）から紫川、千江の句が掲載されている。(6)

三、漱石と寺田寅彦

「紫溟吟社」の主要なメンバーの一人に、寺田寅彦がいる。寅彦もまた、五高時代に熱心に俳句を学んだ一人だ。厨川千江、蒲生紫川に少し遅れて漱石の家を訪ねている。

寅彦は、明治二九（一八九六）年九月五高に入学した。明治三一（一八九八）年、同郷の会の「土佐会」で、試験の成績の悪かった生徒のために「点を貰う」委員となり、漱石と田丸卓郎の家を訪問したのが、「生涯の師」と出会うきっかけとなった。

明治三一年の二年生の学年末試験は六月二四日から三〇日までである。成績不良者の発表は七月一四日だから、漱石の家を訪ねたのはそれ以降のことだろう。七月末には、内坪井の家に転居しているので、転居間際の訪問だったことになる。寅彦の「夏目漱石先生の追憶」（『漱石全集』別巻、平八・二）によると、寅彦が点を貰いに訪問すると「玄関払ひを喰はせる先生もあつたが夏目先生は平気で快く会つてくれた」という。この時期は、例の鏡子夫人の事件（白川で溺死しそうになった事件）から、わずか二カ月後のことである。あの事件が

ではないと断ると、それでは何か文章を書いてくださいと、実は演説部委員は雑誌部委員も兼ねていたため、さすがの漱石も断り切れなかったというエピソードのある文章である。[1]

『龍南会雑誌』第五〇号（明二九・一一）からは、中内蝶二だけでなく多くの句作が始まっている。第五三号（明三〇・二）には漱石の漢詩が、第五七号（明三〇・六）には、俳句の掲載はないものの批評欄に枯骨の署名で「本誌第五十六号を読みて」という文が掲載され、そこに「俳句は漱石先生に嘱して一層撰攻を厳にせられんことを望む」との言がある。漱石赴任後一年を経て、生徒たちの間に俳人漱石の名前が知られてきたことを示している。

明治三〇（一八九七）年一月には『ほとゝぎす』が創刊されるが、漱石が、同年五月二五日付村上霽月宛書簡に「ほとゝぎすは学生并に小生宛一部くれたり」とあることから、生徒に『ほとゝぎす』を紹介していたことが推測される。第五九号（明三〇・一〇）「雑報」には「俳句の投稿者頗る多かりしも、是正を瀬石先生に乞ひたるに、悉く再考を要せずんばとのこと。諸君尚一番の練心を願ふ」とあり、漱石を瀬石とまちがってはいるが、漱石に俳句の批正を請うている。『龍南会雑誌』第六〇号（明三〇・一一）には漱石の俳句が初めて掲載された。「所感」の前書で「ある時は新酒に酔て悔多き」、「禅僧宗活を訪ふ」の前書で「僧に対すうそ寒げなる払子かな」「其許は案山子に似たる和尚かな」の二句、「朧枝子幽居を訪ふ」の前書で「淋しくば鳴子をならし聞せうか」の全四句である。不思議なことに漱石の五高在任中、『龍南会雑誌』に掲載された句は、この四句だけである。どのような基準でこの四句が選ばれたのか、漱石自身がこれらの句を掲載するように指示したのかも不明だが、違和感を感じる。これは、漢詩が七首掲載されているのに対してやはり少なすぎる。漱石は五高在任中、自身の俳句を『龍南会雑誌』に掲載することに消極的だったとしか思われないのだ。ただ、生徒たちの間に俳人としての名が知れ渡ったことだけはわかる。

このようななかに漱石に俳句の指導を乞うため自宅を訪ねてきた生徒が、厨川肇（千江）と蒲生栄（紫川、のち原姓となる）の二人である。厨川千江は、明治一一（一八七八）年一月一八日島根県生まれ。明治二九（一八九六）年五高文科に入学した。中学時代から俳号を用いており、「千江」は故郷の松原湾が「千江が浜」と呼ばれていたことに由来するという。[2] 蒲生紫川は、明治一二（一八七九）年一〇月福岡県生まれ。明治三〇年に五高第三部（医科）に入学した。

明治三一（一八九八）年一月、紫川は五高の習学寮で同室だった千江と話をしているうちに「俳句を作ってみよう」ということになり、後日数十句を持ち寄った。しかし、ほとんど俳句の知識のない二人は、「これでは面白くない」と千江が「夏目先生が句を作るということだから話を聞きに行こう」ということになり、当時井川淵町にあった漱石の家を訪問した。次に来るときには俳句を作って来るようにと漱石に言われて「田螺十句」を持って行ったと記している（「九州の新派俳句会」『懸葵』明三七・五）。

この最初の訪問の時期について蒲池正紀は五月くらいのことと推測した。[3] しかし、「田螺十句」のうちで、佳い句と評された「田螺とはあはれな貝の名なりけり」が、五月五日刊の雑誌『日本人』に掲載されている。ということは、漱石の家を二度目に訪問したのは遅くとも四月下旬のことで、最初の訪問は四月ということになるだろう。つまり、漱石が井川淵の家に引っ越してまもなく彼らは漱石を訪問したのだ。『日本人』は五日と二〇日の月二回の刊行だったが、以後毎号のように二人の俳句が掲載され、五高を卒業する明治三三年七月までに千江二六句、紫川三三句が掲載された。[4]

この二人の作句意欲はすさまじく、「日に百句二百句以上を物した

る。しかし、一方で漱石の俳句への情熱は松山時代ほどではなく徐々に失われていくように見える。それをつなぎ止めたのが「紫溟吟社」の学生たちとの関わりではなかったか。漱石と「紫溟吟社」の関わりを中心に論じたい。

二、「紫溟吟社」以前

漱石の赴任は、第五高等学校の校友会雑誌『龍南会雑誌』第四六号（明二九・四・七）に「諸講師来任」の見出しで加藤晴比古、鶴田禄四郎とともに紹介されている。漱石赴任前の雑誌であるが、「夏目金之助氏。吾校の英文学に於ける佐久間教授あり。吾人窃に以て相誇れり。而して今夏目文学士の来任に会す。吾人は本校の為に其人を得たるを喜ぶ。願はくば吾校の為に、又た斯道の為めに、各その特長を発揮して、吾校をして他校の後に瞠若することなく、またこれを学ぶものをして其の望を満たしめ、以て斯道に大に尽されんことを」と、初の帝国大出身の英語教師として期待されている。このときは、来任する夏目金之助が、「漱石」という号をもつ俳人でもあることなど、どこにも記されていない。まだ『ほとゝぎす』創刊以前のことであり、漱石の俳句は雑誌『日本人』や新聞「日本」に時折掲載される程度だから、これらを購読していない限り熊本で漱石の俳句を知ることはできなかったはずだ。

五高での俳句の状況は、漱石赴任以前の『龍南会雑誌』「文苑欄」を見ると、第五号（明二五・三）に「春雨の跡や寂しき梅のかげ」他四句、第二三号（明二七・二）に「俳句（冠句附）」として「乳貫更けし人戸を叩兼」他七句、第二四号（明二七・三）に「親心子の初陣の遠百度」他八句の全二二句が掲載されているだけである。

しかし、漱石着任後の『龍南会雑誌』第四八号（明二九・六）には、まとまった俳句が現れる。中内蝶二の「昼寝の夢」と題する一二句。梓氷川の「俳句九首」である。中内蝶二は当時第一部文科二年の中内義一である。中内は硯友会会員でそれ以前は専ら和歌ばかり作っていた生徒である。後年、博文館をへて万朝報の記者となり、蝶二の号で小説や戯曲などを書いた。漱石は、赴任当初文科二年の監督だったから、この一連の俳句作句の契機は、漱石と考えるのが妥当だろう。

では、漱石が俳人でもあることを知らしめたのはだれか。おそらく松山時代の教え子たちではないだろうか。山本信博の回想（「松山から熊本」『漱石全集』別巻、岩波書店、平八・二）によると、山本は漱石が松山に赴任したときには、すでに中学を卒業していたが、卒業生の「腕白者数名」のうちの一人として「新米先生を冷かしてやらうぐらゐの意味を以て、先生の下宿を訪問したが、僅に三十分か一時間の談話中に、何か知らん感心させられてしまつて、虎の如くにして往つた者が、猫の如くになつて帰って来た」ことがあったという。この愛媛県尋常中学校出身で、五高に進学した生徒たちは、漱石を「同県出身の先輩を迎へるよりも、より以上の悦びと親しみとを以て先生を歓迎した」。県人会に招待しただけでなく、「一校崇敬の中心たる先生が自分等と特殊の関係にあることを誇ると同時に、先生を他県の人、他族出身の人の手に渡すことが惜しくて堪らない様な感じを以て、常に先生の周囲を取り囲むで居た」と山本は記している。松山では、漱石の俳句は地元紙「海南新聞」に掲載されていたため、夏目先生が漱石の号で俳句を作っていたことは周知のことだった。松山の生徒たちが誇らしげに熊本ではまだ知られていない「秘密」を語ったであろうことは、想像に難くない。

『龍南会雑誌』第四九号（明二九・一〇）には、漱石の「人生」が掲載される。これは、演説会で何か「講演」をするよう頼みにきた演説部委員に、文章を書くのならともかく、人前で講演をするのは得意

崇城大学　紀要
第46巻　令和3年3月

漱石と「紫溟吟社」

村田　由美*

要　旨

夏目漱石が、第五高等学校で生徒に請われて新派俳句の結社「紫溟吟社」を指導したことは知られているが、その実態を論じたものは、わずかに蒲池正紀の「紫溟吟社・その成立と終焉」（『熊本商大論集』一五号、昭三七・一二）があるだけである。

今回、俳誌『ほとゝぎす』、雑誌『日本人』、新聞「日本」「九州新聞」「九州日日新聞」をつぶさに調査し、生徒たちの俳句がどのように掲載されたか、「紫溟吟社」に漱石がどのように関わったかを考察した。特にその中心人物である厨川千江、蒲生紫川、寺田寅彦に注目し、漱石との交流を明らかにし、熊本時代、五高教師としての漱石の一面を考察した。

キーワード

漱石　俳句　紫溟吟社　熊本時代の漱石　第五高等学校

一、はじめに

漱石は、明治二九（一八九六）年四月一三日から明治三三（一九〇〇）年七月一五日まで、四年三カ月熊本で過ごした。その間、第五高等学校（五高）の英語の教師として多くの生徒を指導し、感化した。漱石の後を追って帝国大学英文学科に進学した者もいる。

また、生徒に請われて俳句の指導も行った。五高の生徒を中心に結成された「紫溟（しめい）吟社」は、熊本においては初の「新俳句」の結社だった。「紫溟吟社」は、五高の生徒だけでなく、やがて市井の人々にも広がっていく。この「紫溟吟社」が熊本における「新俳句」普及に果たした役割は大きい。

熊本時代の漱石は、まだ、作家としての片鱗も見せていない。しかし、松山時代、子規が結核の病後を養うために漱石の下宿に同居したことをきっかけにして、漱石は俳句開眼した。熊本時代は、松山時代に引き続き、俳句を作り、その数はおよそ一〇〇〇句に上る。生涯に作った俳句はおよそ二五〇〇余句だからその四割を占めることにな

*崇城大学非常勤講師